

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

1990—11



# 保育所保育指針 解説

● 編 著 ●

石井哲夫

岡田正章

平井信義

## 第1章〈一問一答〉

保育指針をよりよく理解するために

## 第2章〈座談会〉

保育者にとって望まれる資質とは

## 第3章

保育計画のあり方をめぐって

## 付 録

保育所保育指針（全文）



## 特 色

- 保育対策部(厚生省)の主要メンバーである平井信義(座長)、岡田正章、石井哲夫先生編で協力者の先生方による共著です。
- 初心者にもわかりやすく百問のQ&Aを設定し、基本事項から新しいキーワードまで具体的に解説しています。
- 今回の改訂では保母の援助について大きくとり上げられていますので「保育者にとって望まれる資質とは」というテーマで保育者のあり方について説明してあります。
- 改訂にそった新しい指導計画については考え方の基本を示してあります。

A5判・240頁・定価1,300円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの  
フレーベル館

# 幼見の教育



第89卷 第11号

幼  
児  
の  
教  
育  
目  
次  
——第八十九卷 第十一号——

舞台の上の保育……………津守 真……………(4)

特集〈日・火・灯〉

“火”と私……………城戸崎 愛……………(12)

中世のあかり……………伊藤里麻子……………(15)

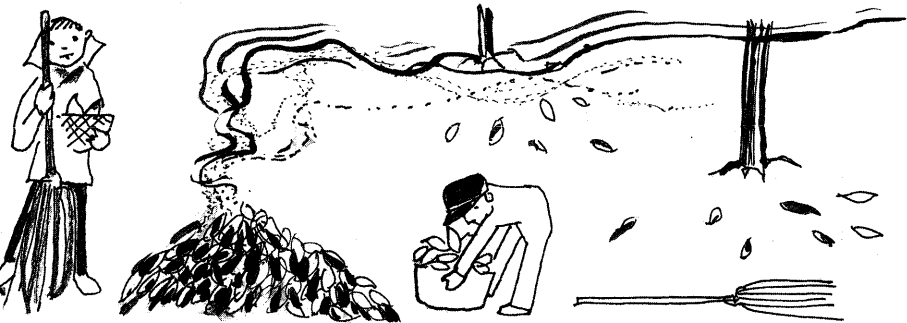
たき火……………豊田 一秀……………(22)

「日、火、灯」と「闇」……………橋本やよい……………(26)

チエコ便り(6)

再び「社会改革の進む中で」……………大梶 優子……………(32)

© 1990  
日本幼稚園協会





園庭より(7)

夕やけ……………松井 とし… (38)

幼稚園のなかのいざこざ……………倉持 清美… (40)

子ども達とのこと……………島田 久美… (50)

若いお母さんたちへ

自らの「老い」を受け入れ思うこと……………塚田 幸子… (55)

表紙イラスト・林 健造

扉題字・堀合 文子

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／豊田 一秀・上坂元絵里

編集部・大沢 啓子



## 舞台の上の保育

津守 真

この夏、私は、台湾の文化基金に招かれて講演にいった。三十代、四十代の若い指導者たちが、遊びを育てる保育を推進しようと努力しておられる姿に私は感銘を受けた。三日間の研修会の最終日に、堀合文字氏の保育の実際がなされた。印象深かったことはいくつもあるが、このことについて記したい。

三、四、五歳の子どもたち約二十人を、大きな会議場の舞台の上でH先生が保育し、それを百五十人程の観客が客席から見ると頭で考えるとこれには多くの問題がある。保育者にとってすべて初対面の子どもたちである、言語が通じない、子どもたちには初めての場所であり、舞台という特殊な状況である等。半分疑念をもって臨んだ観客も多かったろう。それにもかかわらず、舞台の上の保育を研修会のプログラムに企画しようという主催

者の意気込みと、それを受けて立ったH先生の自信とがこれを実行させたのだと思う。

私はかつてH先生のクラスに長年出入りしていたので、必要となれば目立たない所でお手伝いしようと頭の隅で考えていた。しかし幸いにその機会はなかった。最初は保育を見物する自分自身に居心地の悪さを感じていたが、次第に観客のひとりとして見ることで、きるようになった。九時開始なのに八時頃からH先生は舞台にいて、保育室らしくなるように準備していた。舞台の上にはこの子たちに親しみのある玩具が幼稚園から運ばれていた。母親と先生に付き添われて、八時半頃から子どもたちが少しずつ来はじめた。

#### 舞台の上で

H先生は来た子どもにひとりひとり声をかけた。ほとんどの子どもたちは、じきに自分が見付けた玩具で何かをしようとした。

ひとりの男児Xが先生に手を引かれて舞台上上がるが、すぐに下におりてしまうことに私は目をひかれた。それを何度もくり返していた。こんな舞台上上がりたくない子どもがいても不思議はない。そのうちにXは舞台の上のH先生のお尻をぶつては下に逃げてくるようになった。両者の間に何が起こったのか詳細は分からないが、先生とこの子との間に関係がつけられつつあることが分かった。Xはこうした迷いの後に、舞台上の机の前で先生と折紙をはじめた。これまで帽子をかぶったままの子が、ときどき帽子を脱いで、折紙をじっくりとやり始めた。長い迷いの後にその気になって自分の活動をはじめた子ども

もの強さを見せてもらったように思った。

その間に、舞台の上では、数人ずつ子どもたちが寄り合って、箱積木で舟を作ったり、ブロックをつなげたり、衣裳をつけておうちごっこをしたり、絵本をよんだり、H先生のいつもの保育室とおなじ風景が生まれてきた。子どもたちはそれぞれに自分の活動をしはじめていた。

六、七人の男児が舞台の上を端から端まで走り回り、ピストルで打ち合ったり、ブロックを振り回して暴れ回った。それはかなり長時間つづいた。H先生はときどき「まねだね」と声をかけて、それを中国語で子どもに伝えて貰っていた。（通訳の人が壁際にいて、ときどき通訳をしていた。）H先生はそういう男児たちの激しい動きを止めようとはしていなかった。おうちごっこの女の子のひとり、男の子たちを追いかけて立ち回りを演じた。私の傍の通訳の人によると「泥棒」と言ったとのことだった。女の子は男の子たちを追いかけるのを楽しんでた。その男の子たちは、後半になると、武器をすてて、身をぶつけて互いにもみ合うようになった。この間に互いに身体を寄せ合って親しくなる体験をしたのだと思う。

子どもたちの喧騒の中、舞台の中央で、数人の子どもが頭を寄せて小さな動物やブロックを並べることに没頭していた。周囲にかまわずに、将棋のようなゲームをしているよう



に見えた。

だれかがH先生にお面を作ってほしいと言った。先生がひとりの子どもに作ると、次々に子どもたちが頼みに来て、先生はお面作りに忙しい。作ってもらった子はそれをかぶって歩き回る。先生に作ってもらう体験は、次には自分で作ろうという意欲を育てている。私はこの先生の保育で何度も見慣れた光景である。

こうして十一時まで二時間以上にわたって、子どもたちはそれぞれの活動に専念し、それは次々に変化していった。ときどき舞台からおりようとする子どもがいると、H先生は「そこまでね」と声をかける。舞台という空間の境界があることを意識しての発言だろう。

十一時十分前頃になって、H先生は「今日はこちら片付けましょう」と声をかけ、通訳がこれを子どもにも伝えた。子どもたちは片付けはじめた。「もうおしまい？」とたずねる子もいた。それから一列に並んで子どもたちは舞台をおりた。最初は疑念をもって見ていた人たちも納得するものがあつたのだろう。観客から一斉に拍手が起こつた。子どもたちに対して、また、H先生に対してだったと思う。

皆がおりても、最初舞台上上がるのをためらっていたXは、机の上で熱心に折紙をつづけていた。丁度、歌舞伎の幕がおりてから、独白の場があるように、この子はひとりで熱心に仕事をつづけた。その静寂のひとつとき、観客の目はそのひとりの子どもに集まってい

た。その子は悠然と最後までつづけ、H先生はそれをゆっくりと見守った。Xは自分で終わりにし、作ったものを手に持って舞台をおりた。再び観客から拍手が湧いた。

舞台の上で子どもたちは何故落ち着いて振る舞ったか

この三日前に、私は案内されて、台北市内にあるこの子どもたちの通う成長児童学園幼稚園を訪問した。西洋風の住宅を改造し、小さな部屋がいくつもあるこの幼稚園で、子どもたちが自由に遊びこんでいるのが印象的だった。(八十人の幼児に、給食の係も含めると二十人の大人がいる)。この子どもたちは、日頃から、自由な場で自分の活動することに馴れている。このことは、はじめての舞台の上でも落ち着いて遊ぶことを可能にした第一の理由であろう。

H先生は、この子どもたちにとって初対面の人だが、子どもたちは、自分を支えてくれる人であることをすぐに分かったようだ。すぐに心を開いてH先生に近寄っていった。こういう保育者がいることが舞台の上の保育を可能にした。

そして更に、この日の保育は、観客が見ている劇あそびのような場であることを子どもたちが認識していたことが、舞台の上の保育を可能にしたのだと思う。

### 劇あそびとしての認識

「今日は先生は見ているの?」という子どものことばが最初のころ聞かれた。担任の先

生は今日は観客であることを子どもたちは知っていた。また、舞台の端から観客を眺めて、「みんなここに住んでいるの?」と言う子どももいた。皆が見ている前で自分らしく振る舞うことを、担任の先生からもH先生からも期待されていることを子どもたちは承認していた。

この日、ある子どもたちは衣裳を着けてお姫様になって振る舞い、またTVの中の人物になって走り回った。日常生活では出しきれない自分自身を、ここで表現して遊んだ。劇あそびとは、せりふを覚えて筋書きに従って行動することではなく、子どもがある人物になりきり、それを自分のものとして活動することである。その点で、子どもが自分自身になりきり、自分を十分に発揮して遊ぶことを実現しようとする保育と本質的に共通なものを含んでいる。

子どもも、保育者も、観客も、舞台の上の保育は、それが普通の保育と同じように見えても、劇あそびの一種であることを認識するとき、それは異常な状況ではなくなる。

舞台には花道も備えられている。正面の緊張に耐えられなくなった子どもは、この中間地帯に逃げ出し、観客を見ておどけて見せる。観客は、子どもたちが舞台の上でそれぞれに自己実現してゆく過程を見て、自分も一緒にはらはらしながらも、最後には自己実現するのを見て、自分も満ち足りた思いになる。

担任の先生との会話の中で

この翌晩、私はこの子どもたちの担任の先生たちと夕食を共にし、お茶を飲みながら話し合う時間があった。先生たちの感想を次に列挙してみる。

○自分のクラスの子どもたちが、はじめて会う先生と舞台上に上がってどうなるのかと、ハラハラして見ている。

○皆、よくやってくれたと思う。この子たちを誇りに思う。

○舞台からおりて母親のところにいきたい子どもがいた。手を引かれて舞台上に上がったが、そのままでは参加しなければいけないものだろうか。

○Xは、いつもはこの日のような迷いを見せない。違う状況におけるXを見て参考になった。

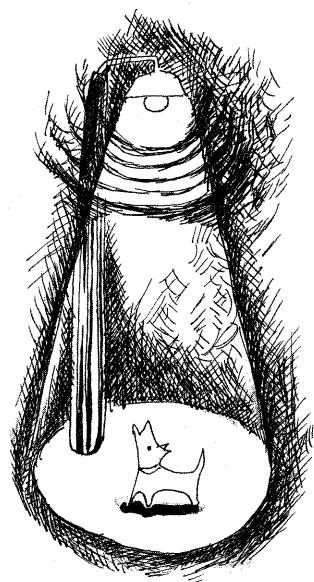
○観客になることができたので、ふだん自分がしていることを距離をおいて見られた。今日、舞台の上で、活発な男児たちとおうちごこの女兒とが、次第に交流して遊ぶようになったのは予期しないことだった。二時間も遊びつづけたからだろうか。いつもは各部屋ごとに活動を分けているので、違う活動の子ども同士が接触する機会がないからだろうか。環境の作り方について今後研究したい。

私は担任の先生たちが的確に見ていることに感心した。そして、保育の実際はモデルにならってやれるものではなく、いつも「私の保育」を研鑽することがたいせつであることを述べた。

\*

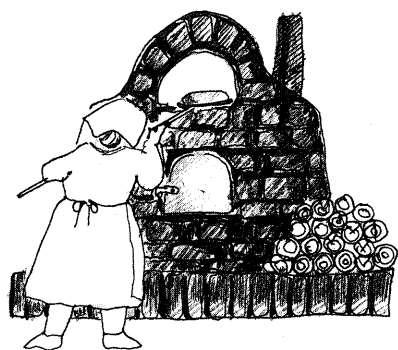
私の養護学校に、演劇を専門にする人がボランテニアで来ている。その人が、この学校は芝居の舞台のようだとやったことがある。それぞれが自分自身を表現して動いている保育室は創造的な空間で、その点で演劇の舞台と共通なものがあることを指摘したのだろう。そう考えると、普段の保育も舞台の上の一種である。保育者が見られている意識を失ったら、保育の場は自分勝手を通る密室になってしまうかもしれない。

(愛育養護学校)



“火”と私

城戸崎 愛



子供の頃、冬休みになると、よく霞ヶ浦湖畔の祖父の家に遊びにゆき、自然に親しむのが常でした。両親からも離れて時には淋しい思いもしましたが、懐しい思い出が一杯の日々、昨日の事のように想い出されるのです。

特に都会と違って何事もスケールの大きい空間での日常生活に目を見張る思いでした。

土間のかまどの炎に引かれ、美味しく炊き上がったお釜からおこげをおむすびにしてもらい、みそを

ぬりあつあつを頬張ったり、茶の間の大きな大きな炬燵に首まですっぽり潜りこんだり、子供心にも暫しのぬくもりに心の和む思いでした。

台所で女性の、殊に主婦が専ら親しんだ“かまど”の火を眺めていた時、その時はまさか自分が現在のように“火”と共に生活してゆくなんて想像もしていませんでした。でも何故か、私は、焚火大好き人間でした。正月も過ぎ、お飾りを庭で恵方えほうに向かって燃やしていた祖母の横で、私も幼心に、年中

行事としての事始めに心引きしまる思いでした。又落葉をはき集めて焚火をし、両手をかざしてぬくもりながら、そっと灰の下に俵はせておいたお芋をフーフー言いながら、そのままかぶりつく……おいしかったです。自然の中に平和に過ごした昭和の初期の思い出です。

“火”の明るさと暖かさの他に、もう一つ何か分からなけれど魅せられたのでした。

誰でも子供の頃の焚火との思い出はお持ちだと思います。上手に焚火が出来るようになるには、火の性質を知り、薪をくべるタイミングを掴み、下から枝で持ち上げて、空気を通してやるコツ……。失敗しては新聞紙を何枚も使って火をつけ直し、子供なりに自分でコツを会得したものでした、恐れつつも“火”に触れ、興味を深め、そして慣れてゆく……。身も心も育ってゆくのでした。この頃の子供達には中々そのチャンスも少なく、“火”をじっと見つめて、その炎の中に何かが見えるのではないかしらと

……そんな心のゆとりもなくなってしまった事、子供も忙し過ぎる世の中、悲しくなります。

大分以前に、NHKの番組で“人間は何を食べて生きてきたか”というシリーズで、その中に“パン”を取り上げてました。食の原点を見つめる面白い番組でした。小麦粉をねったものを、砂漠の砂の中にうずめ、その上で焚火をする。それも、木ではなく、らくだの糞を乾かしたものが燃料でした。焚火の中の焼芋と同じだと胸をうたえました。パンも時代が進むにつれ、壺の中で火を燃やし、周囲に（壺の）はりつけて焼く。更に石釜が築かれて……、電気のおーブンになり……。又最近では石焼きパンに戻り人気が出て若い人達に賞味されているこの頃。コーヒーマシナリで、焙り方でも炭焼きコーヒーマシナリで、これを若い人達は“手作りコーヒーマシナリ”として愛でているこの頃です。直火のうまみなのでしょうか。何はともあれ、原点を見直そうという生活になりつつあるようです。嬉しくなります。ほっ





きです。

ちなみにちょっと辞引きをひいてみました。『二種類の火』という項にひきつけられました。引用しますと、

アフリカの“カンパ族”では、家の外の火は男が焼く料理に使い、家の中の火は女が煮る料理に使う。同じアフリカの“イテソ族”では、“男の

## 中世のあかり

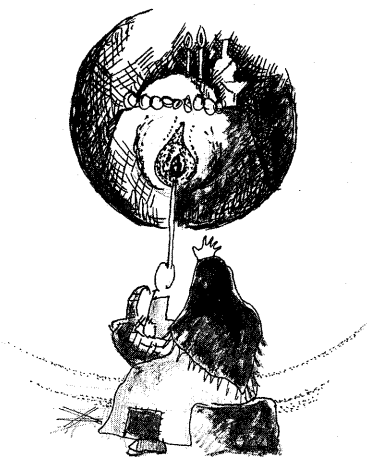
伊藤 里麻子

ここに挙げた絵は、十七世紀の北フランスの画家、ジョルジュ・ド・ラ・トゥールの描いた「大工

火”は地面の上でそのまま燃やす裸の火で、“女の火”は四つの石で作られる炉で焚かれる火……と。だとすると、私の好みは戸外での勢いのある直火なら……。

私は“女”じゃないのかな？……と苦笑してしまったのです。

(料理研究家)



の聖ヨセフ」(パリ、ルーブル美術館)である(図1)。幼いイエスが父ヨセフの仕事場にいる。イエ



は、労働にいそしみつましく生きる人々の、日々の暮らしの尊さを思わせるものがある。この絵のなかで光はじつに雄弁なのである。

十七世紀初頭のイタリアの画家カラヴァッジオ作の「聖マタイのお召し」（ローマ、サン・ルイージ・ディ・フランチェージ聖堂）（図2）も光が印象的な絵である。一見したところ、ここに描かれているのは、当時のありふれた光景である。暗い室内でテーブルを囲む人々。一条の陽光が差し込み、一番奥で金を勘定する若者に注いでいる。この若者こそマタイである。マタイは取税人だったが、キリストに選ばれ弟子となった人物である。この絵はマタイがキリストの召命を受けた瞬間を表す場面なのであり、一条の光は彼を召命する神の意志である。光は世俗の世界から神の世界に選ばれて入る、マタイの運命の変化を劇的に示している。

神は光である。

これは、この二枚の絵の描かれるより前の中世に



◀ 図2 「聖マタイのお召し」（一六〇〇年頃）





▶ 図4・A グリザーユ窓

オーストリア、ハイリゲンクロイツ修道院

に用いられることもあった。しかし、無色の（と  
いっても、後述するが、今日のように全くの透明で  
はないが）ガラス窓を持つ教会も建てられたのであ  
る。シトー会という修道会に属する教会である。



▶ 図4・B グリザーユ窓

図例（図4）にみられるように、シトー会の教会  
の窓には、色のないガラスが用いられ、窓一面に文  
様が描き出される。この図では植物の文様である  
が、組紐文など抽象的な形の文様の例もあるし、両  
者が組み合わせられているものもある。このような窓  
を、ステンドグラスに対し、グリザーユ窓という。  
シトー派の建築にもステンドグラスが用いられな





の、十三世紀の記録をみると、ステンドグラスは取り除くべし、と述べられている。

シトー派の教会の、こぢんまりとした建築の、粗い石の壁には飾りが無い。そのグリザーユ窓からは透明な光が溢れる。清らかな神の光である。

透明とはいっても、当時の技術では、ガラスは完全な無色透明というわけにはいかない。濁りがあり、わずかながら灰色や緑色が入っていたり、黄色がかっていたりする。そのことがかえって、窓を通る光を柔らかいものにする。色のない窓は、外の風景の色も映し出す。窓は自然の色を堂内に導き入れ、神の世界と外の自然を重ね合わせる。

ゴシックに先行するロマネスクの教会建築は、重みを壁で支える構造のため、窓はあまり大きく開けることができなかった。そのため、教会のなかはかなり暗い。

これに対し、ステンドグラスの窓をもつゴシック

様式の教会堂は、ほとんど壁全体が窓といってもよいような構造である。ところが、教会のなかには、ロマネスク教会ほど暗くはないが、やはり決して明るくない。ステンドグラスが原因である。ステンドグラスを通る光は、ガラスの色に遮られて、外光よりもかなり暗いものになっている。中世の教会のなかには、決して明るいものではなかった。

暗い堂内に差し込むかな光。光の届かないところはなお暗い。暗闇には、わずかな光も貴重である。人々はその微光に神の姿を見もし、暗闇から照らされることの喜びも感じた。

わずかな光といえば、最初の絵(図1)の蠟燭の灯も暗い光である。蠟燭の灯は、あかりの周囲の限られた範囲を照らし、見る必要のあるものだけを浮かびあがらせる。蛍光灯のように、不慮に、灯下の物をすべて照らしてしまうことはない。

図2のような、窓からの光もまた、今日の、マンションのベランダやビルの窓から、元気よく室内に



たき火にはこつが要るところがよい。まず落ち葉の積み方。初めに骨組みとして小枝を井桁型に少し組み、その上に落ち葉をまぶすようにふわっと積んでいく。形はできる限りとんがり形にする。風向きを考えて、山の両側にそつとトンネルを掘り風穴とする。安全のために水バケツを用意し、トンネルの中の小枝に着火すれば至福の時が始まる。

たき火にはいくつかの大切なポイントがある。第一に、例え濡れ落ち葉であっても自ら燃えようとする力を内に秘めていることを信じる。第二に、それ故にたき火の火をいたずらにいじらないようにすること。特に初心者は、火の調子が悪いときについてこの過ちを犯してしまう。どんなにくすぶっていても、落ち葉は一枚一枚燃え上がる時を待っているものである。白い煙を上げてくすぶっていたものが、少し黄色の煙を出し始めたものだ。黄色い煙は燃え始めのサインである。第三に、後から落ち葉をたす時も、常に「とんがり形」をこころが

け、上から優しく葉を落とすこと。第四に、もしも、どうしても消えそうな時は、中の小枝を少し足すこと。

いじられずに、ゆっくりと燃え切った落ち葉の灰は白く細やかで美しい。力を全うしたものの悔いのなさを感じる。それに対して、いじられた、たき火の灰は黒く荒い。いかにも燃え残りといった風で未練がましいような、恨みがましいような感じである。

幼稚園でも、山の大銀杏の枝が高い空を差すようになる頃、落ち葉たきをする。まず大きな木を組んで、その上に落ち葉をまぶし、大人の背丈もある大きなとんがり山を作る。周りにバケツを並べ、子どもが近付きすぎないようにライン引きで線を引いた後、いよいよ着火である。火は怒った龍の舌のように天をなめ、火の粉や落ち葉を空高く舞い上げる。子どもたちは、皆、空を指差し歓声を上げる。火は人を集め、人を興奮させる力を持つ。



冬は家なしにはもつともかなしいときでありま  
す。火をたく家さえ持っていれば、だれでも身と  
心とをやすめることができました。親や年よりが  
子を愛するということにも、やはりひとつの制限  
のようなものがあつたのです。夕がた外の風がだ  
んだんつめたくなるころから、家の中にはあかい  
火がもえはじめます。母が庭においてまだいそが  
しく立ちまわっているあいだ、あぐらのひざの上  
に子をのせて、小さな手をあたためてやるにも歌  
がありました。それをだれから学ぶかというと、

じぶんが小さなうちに何十ぺんとなく、きかせて  
もらつたのが土台になつているのですから、よつ  
ぽど古いものということができます。

—信州あたりにもおこなわれているのは、

子どもに手を出させて指と指とのあいだを、おさ  
えていきながらこうとなえるのです。

火い火いたもれ

火はないないと

あの山越えて

この田へおりて

このうちきけば

このくぼつたみにすこしこざる

または「ここへくりやちよっくりござる」などと  
いって、こそぐつてわらわせるのであります。

柳田国男『火の昔』（昭和18年）

—火をたくたのしみ—より



ものである。どこからお化けがでてくるかしれない。このときともされた灯りほど子どもを安心させるものはないだろう。

「ひ」はまた、違った面も持つ。読者は次のような体験をお持ちだろうか。映画館で暗闇に慣れ、夢の世界にひたっていたのに、映画館を出て、突然日の光にさらされたとき、ひたっていた夢の世界がくしゃっとくずれ、現実の世界に引き戻された、という体験である。この場合の「日」は、暗闇から守ってくれる「灯」に比べ、あまりに現実的で暴力的でさえある。

このように「日、灯」と「闇」は対照的なものであるが、お互いに深いかかわりをもっている。私たちの毎日は、朝日がのぼることで始まり、夜を迎えて終わる。一日の中に、日と夜、明るいものと暗いものがあることを、私たちは、毎日の体験で知っている。そのような日と夜の対照は、私たちの根源的な生活のリズムとなっており、人間の心の深いところ

ろにあって、心の成長を促す根源的なイメージとなっている。それらは、対立したり敵対したり、補いあったりして、私たちの心の成長に大きな役割を果たすのである。

私たち心理療法家は、心の働きを表すものとして、よく神話や物語をモデルにとる方法を用いる。ここでも、心の成長に対する「日、火、灯」の役割をのべるために、その方法を用いてみたい。

まず思い浮かぶのは、ギリシャ神話『アモールとプシケー』の、プシケーのともした「灯」である。プシケーは、その美しさ故、夫に請われ結婚し、幸せな結婚生活を送っていた。ところが、ある日、夜毎訪れる夫の顔を見たことがないのを疑問に思いだす。そしてついに、灯をともして、暗闇の中の夫の顔を見るのである。正体を見られた夫は失望して去ってしまう。その後、プシケーは、数知れぬ困難や試練をくぐり抜け、やり遂げることで、夫の愛を





『こわれた腕環』がそれである。主人公アルハは、将来名なきもの（神々）に仕える大巫女となるべく、神殿に連れてこられる。神殿の地下は迷宮になっていて、暗闇、夜の支配する世界となっている。迷宮の中には秘宝もあるのだが一切が闇の中に閉ざされ、時間も止まったままである。アルハは、黒い服を着て、将来期待された役割を担うべく毎日何も考えず必要なことだけをして、変わることにない日々を繰り返している。

ところが、ある日、その地下の迷宮に、男が入り込んでいるのを見つける。男は、その先から火を発する杖を持っており、その火で洞窟を照らしている。アルハは、驚き、侵入されたことに対して激しい怒りを覚える。しかし同時に、強い好奇心も抱く。この男は何をしにきたのだろう。あの「火」は何だ。あの「火」で一度、今まで見たことのないこの洞窟のきらめきを見てみたい。

アルハは好奇心にうちかかず、その男と交渉を持

ち始める。ある日、男はその杖の火を燃やしてアルハを照らし出し、衝撃的なことを口にした。「あんたにあんた自身の姿を見せてやったのさ」。そして、アルハというのが、本当の名前でないことを告げ、本当の名前を取り戻し、この闇から日のあたる世界へ出ていかないと誘ったのである。アルハは迷う。日のあたる世界とはどんな世界だろうか。果たして自分はその世界でやっていけるだろうか。その男を生かすも殺すもアルハ次第である。しかし、アルハにはどうしてもその男が殺せず、闇と火の間で激しく揺らぐ。そしてついに、アルハは日の世界に出ていく決心をする。二人は闇が迫ってくるなか、男の照らす杖の火を頼りに、迷宮を抜け出る。二人が抜け出たとき、迷宮は音をたてて崩れ去る。

この物語で心を打たれるのは、男の持つ杖の火が消すか、燃やしたままにするか迷い、闇と火の間で揺らぐアルハの姿である。男を殺すのは簡単である。でも何故か殺せない。かといって、今まで安穩



ろうか。心の成長は、火と闇の対立や矛盾を内に孕んで進んでいくものである。女性にとり、本当の自分を求め意識の灯をかかげて生きていくことは困難な道程である。プシケーやアルハの歩んだプロセスは、女性の自立を云々するなら、それは内面的な裏づけを伴わなければならないことを教えてくれている。

\*エリック・ノイマン、『アモールとプシケー』、河

合隼雄監訳、紀伊国屋書店

\*ルルグイン、『こわれた腕環』ゲド戦記2、清水

真砂子訳、岩波書店

(京都大学教育学部心理教育相談室)



## 再び「社会改革の進む中で」

大槻 優子

T様

ブラハは、春の盛りです。果樹の花が、音楽祭が  
というのはやめましょう。今、まさにすべてが「ブ  
ラハの春」です。

社会全体が、大きく速く変化し続けています。そ  
の中にいると、「歴史を生きる」実感がわきます。  
日々の暮らし、人の行動の一つ一つが、歴史をつ  
くっていく証を見ます。文化というものは、「○○  
様式」として類型化され、整理されたものではな  
く、人々の具体的な歩みそのものだとわかります。

その意味で、今、チェコスロヴァキアに住んで、貴  
重な体験を重ねているといえます。

先日、知人が旅の途中でブラハに立ち寄りまし  
た。数年前、ブラハに三年間住んで、チェコ語を学  
び、チェコの人達と交友を暖めた経験をもつ、親  
チェコ家ともいえる人です。ホテルから電話をかけ  
てきて、「チェコスロヴァキアの社会の変わり様  
を、ブラハの変わり様をこの目で見たい。」と、相  
変わらぬのはりきった声でした。ともかく一人で歩  
きまわりたいという希望で、その後会う約束をしま

した。ヴァーツラフ像の前でということ。プラハ市の中心街、ヴァーツラフ広場に象徴的に立っている、馬に乗った「建国の父、ヴァーツラフ王」の像です。私は、そこでの待ち合わせは初めてで、電話を切った後、ふと「渋谷、ハチ公の前で」という言葉と重ね、一人で笑ってしまいました。

翌日、二時を少しまわった頃、汗をかきかき、知人が走って来ました。一人で過ごした時間を充実させた様子がうかがえました。あたかも、買い物途中の偶然の出会いのような挨拶になりました。夕方からの予定までの時間を計算して、「ヴィシェフラドに行きましようか。」と試みてみました。中心街から地下鉄で二駅、十一世紀の城跡、そこを巡らせてある城壁は、現在は静かな散歩道です。朝から歩き通していたにもかかわらず、「ああ、なつかしい。行きましょ。」と、すぐ応じるところがすてきです。電車を待ちながら言うのには、私の足はいつも町から遠ざかり、町の中を歩く時は、顔つきも変

わって目的地めがけて直進するのだそうです。言われてみればなるほどと思えます。それで、プラハ案内を私に希望される折りにはどうなるか予想がつかないというものです。勿論、町見物を目的にする場合は、そう努力しますので、どうぞご安心ください。

地下鉄の駅を出て、徒歩五分、私達は古い城門をくぐり、ロマネスクの円筒形の祈禱堂を右に見て、城壁の上に立ちました。「おお、私のプラハ。」と、眼下を流れるヴルタヴァ川の上流に目を向け、知人は感動の声をあげました。「やっぱり、プラハはきれいだわ。私の住む町も本当にきれいだけど、プラハもきれいだわ。」移り変わりの速い東京で生まれ育った私には、ずしんとくる言葉でした。ゴシック様式の教会の向こうの彼方にプラハ城を見ながら、ゆっくり歩き始めました。午前中の一人歩きの感想が飛び出しました。「プラハは、何も変わっていない。目にみえては、何も変わっていない。こんなに大きな社会変化なのに、みんな落ち着いて暮らしてい

る。」

本場にそうです。人々の日常の暮らしは、相変わらずに見えます。あの大集会が繰り返され、全国ストライキが行われた時でさえ、日々の暮らしは落ちていきました。新しい内閣の人選が進んでいる一方で、各家庭の母親はクリスマスのお菓子を焼き、プレゼントの買い物をし、ルーミアへの援助物資の荷造りをしていました。高校受験を控えた八年生の生徒達は、様々に変わる入試情報の中で平常の授業を受け、説明会も開かれなまま、一枚にしぼられた志望校に願書を出しました。各校長裁量による入試方法が決定したのは、三月半ば、受験日一か月前のことです。生徒自身も、両親も、気持ちの上では落ち着かなかったはずですが、その不安が一つに集まって行動に表れるということにはなりません。職場でも同様なのだと思います。様々な揺れ動く感情を克服しての行動面での落ち着きなのです。知人が「すごい人達だ。」と繰り返す度

に、私も相づちをうちながら、千年も昔にこの城を支えたチェコの人々の暮らしに思いを馳せたことでした。  
(四月七日記)

今、国のレベルで法律が大きく変わっています。これが実際の市民生活で機能するまでには、或る一定の時間を必要とするでしょう。また、それがよりよく機能して、人々の生活に役立つようになるまでには、更に多くの時間がかかるでしょう。それまで人々はじっとして待つわけではありません。いろいろな試みをします。統制から解放されて、「禁止されないことは、すべて自由」とばかりに、個人的な商取り引きが路上で行われますし、奇抜な政党結成への署名運動が人を集めています。また、議会議決事項に反対する、一見軽はずみと思えるような意思表示に人々が連なり動いています。自分でしたいこと、できることをまずはするといった段階なのでしょう。方向性の定まらないエネルギーが渦巻いて



いるようです。

多種多様な新聞雑誌が、飛ぶように売れています。読みたい、いろいろな事実を知りたいというわけです。情報源が豊富になり、情報世界が広がりました。その横で、こんなつぶやきが聞こえます。「新聞代がかさんで、家計にひびく……。」それにもかかわらず、情報取捨選択学習のための投資は、まだ伸びそうです。チェコ語だけではなく、ドイツ語、英語、フランス語、イタリア語の新聞雑誌がそのまま日常生活に入ってくるようになりましたから。残念ながら、日本語の新聞は販売されていません。

政治面で大活躍した学生達へ向けてのつぶやきも聞こえます。「あの緊張感に満ちた勤勉さが欠けてしまった。」組織改革を推進させたエネルギーが、専門領域の学術面で発揮されるまでも、時間が必要なのかもしれません。先日、大学哲学部に立ち寄りましたら、「準備はされた。あとは各自の努力にかかると。」という内容のビラが貼ってありました。

学生達の改革委員会からのものです。学生達の勉強の場の広がりが、勉強の仕方そのものを変えていることも確かです。大学の外で、或いは外国の大学で勉強できる可能性が広がったようです。知り合いの女子学生も、プラハの大学で沢山学ぶのでなく、アメリカの大学でも学べる道を開拓しました。

市民生活における自由、自主、自発の現れを様々な形で見る昨今です。これらが、単なる混乱状態を意味するのか、社会発展への準備段階として位置づけられるのかは、社会改革開始期からの目標であった「自由選挙」にかかっているように思われます。

(五月二十日記)

自由選挙の投票が終了した日の午後、感動的な野外コンサートが催されました。四十数年ぶりに帰国した指揮者クベリック氏の発案で計画され、実現の運びとなったようです。

相互理解の演奏会

演奏曲目、B・スメタナ「我が祖国」

出演、チェコフィル、モラヴィアフィル、

スロヴァキアフィル

指揮、ラファエル・クベリック

場所、ブラハ市旧市内広場

私達家族は、これだけのことを知って、昼食を終えるのでかけました。広場の中で聴きたかったからです。見たい、座りたいとまでは考えませんでした。

火薬塔の門から続くツェントナー通りは、旧市内広場を経てブラハ城へ向かう「戴冠式の道」の始まりでもあります。こぢんまりとした古い店の並ぶ通りをゆっくり歩いていると、大きな拍手が聞こえ、私達は広場に駆け込みました。演奏会開始予定の二時間以上も前だというのに、人が大勢集まっています。

十四世紀に建てられたティン教会の前に、白い野外ステージが設置され、椅子や譜面が並べてありま

す。大きな拍手は、楽器を抱えて舞台上に登場して来るオーケストラ団員達に向けられたものでした。指揮者クベリック氏が、舞台中央でいろいろ指示をしています。全員が席に着くと、演奏開始の合図が出ました。「間に合って良かった。」胸をなでおろしていると、コンサートマスターが立ち上がって言いしました。「リハーサルです。」

二百人近くはいるかと思える程の大オーケストラが、一つの音楽を作っていく過程を目の前にして、改めて「相互理解」の演奏会の重みを考えさせられました。新聞などでご存知と思いますが、新しい社会体制で出発してすぐ、モラヴィアが独立共和国を求めて動き出しましたし、スロヴァキアの一国独立志向は、最近ますます強まっています。総人口千五百万人の相互理解の課題は大きいのです。それぞれの中心都市ブラハ、ブルノ、ブラチスラヴァを代表するオーケストラの合同演奏が実現したというのは、その規模の大きさではないところに意義があり

ます。

リハーサルは、途中から降り出した雨の為に中止されました。人々は持参した雨具を取り出し、その場を動く気配もありません。各自の傘を広げる空間もなく、お互いに融通しあって、小さな交流の場があちこちにできました。選挙結果の予想、クベリーク氏のこと、市民フォーラム支持、社会改革への期待、それに伴う困難な課題など話題は豊富です。本当に短く感じられる二時間でした。

雨も上がって青空が見え始め、良い雰囲気の中で演奏会となりました。身動きもできずに立ったまま



で聴いた「我が祖国」を誰も忘れないでしょう。社会改革で問われている文化的、政治的、人間的なあらゆる要素が、この演奏会に凝縮され、結晶化されたように思えました。

選挙は、新しい社会体制を支持する人々の勝利で終わりました。新たな出発です。

折りにふれて書き足しました。

ブラハは、もう夏を迎えようというのに、雨の多い、風の冷たい日が続いています。

(一九九〇年六月十六日記)

夕やけ

松井 とし

職員室の下に掘った穴の中で、うさぎが子どもを産んでいた。後産を流産だと思いこんでいた私たちには、全く夢のような出来事だった。

うれしい驚きもつかの間、朝早く穴の入り口に姿を見せた子うさぎたちは、すぐ穴の中に戻ってしまった。その日はありあわせの物で蓋をして帰ってきたが、翌朝、園の前に住む母親から電話があった。何と、朝日と共に子うさぎがチヨロチヨロ出てきて、猫にねらわれているという。

子うさぎたちの引越しが始まった。母親のルンロンと父親のピーターが、穴の中に入っては子うさぎたちを誘う。子どもたちはピョンコピョンコついて出てくるのだが、すぐにまた住みなれた穴の中に戻ってってしまう。

しかし、うさぎの親は決してあせらない。根気強く、出たり入ったりをくり返してい

る。よく見ると、一回ごとに二〇センチ位穴からの距離がのびている。とうとう、白と黒のパンダを二匹、白毛を二匹、小さなフワフワの子うさぎをそとと抱きとって小屋へ移した。

ところが、残る一匹が出てこない。前日、一番初めに子うさぎを発見したT先生は「五匹いた筈だ」という。ルンルンは何度も穴へ入って、出てくるたびに、私の顔をみる。いぶかしげな表情が何かを訴えている。

「どうしたの？ 赤ちゃんいないの？」

「.....」

ルンルンは、またクルリと向きを変え穴の中へ入っていく。

そんな事を午後いっぱい繰り返して、ルンルンも疲れただろう。園庭の中央にゆったり前足をのびてすわった。ルンルンが身じろぎもせずじっと見つめる西の空には、葉を落とした木々の間から大きな夕陽がぼっかり浮かんでみえた。声をかける事さえはばかれるほどに厳肅なうさぎのたたずまいは、祈る母親の姿であつたらうか。

あの秋の日の静かな夕やけは、私自身の心のいたみと共に生涯忘れられない。

(神奈川県立教育センター)

# 幼稚園のなかのいざこざ

倉持 清美

私が観察している園は、商店街と住宅街に囲まれ、  
年少二クラスずつしかないこぢんまりとした園である。  
この園の片隅に位置を占めて子ども達の生活を観察  
していると、子ども達が非常に大きくたくましく見えて  
くる。逆に頼りげない幼児の姿は目にとまらなくなる。

それは決して悪い意味で言っているのではない。大人の  
介在しない子ども同士の関わりのおかげで、子どもたちは  
自分のしたいこと欲しいものなどを相手に伝えていかな  
ければならない。ここに子ども達のたくましさが見える  
のかもしれない。この子どもたちが、交通安全指導の一  
環として、母親と近所を歩いてみるという日があった。

園長に、親と一緒にいるときの子ども達の姿も見てみたら  
と促された私は、母と一緒にいる子ども達の姿を見に外  
に出た。しかし、私が幼稚園のなかで見たあのたくまし  
さはかげをひそめ、母親に甘える幼児の姿があった。

幼稚園という場所は、家庭から離れ、母親から離れ  
て、子ども達が生活する初めての社会的な場である。そ  
こで、一人の教師のもとに集まった同じ年齢の子ども達

の集団に出会う。子ども達の集団では、何も言わなくても自分の欲求を察知して実現してもらえた母子関係のようにはいかない。時には欲求と欲求とがぶつかりあい、いざこざになることもある。このようないざこざ場面では、自分の欲求を相手に受け入れてもらうために、子ども達はあの手この手を使ってくる。まさに、子どもたち同士の集団だからこそ見られるやりとりである。観察していて、子ども達が使う巧みな手や粘り強さに、何度も感心させられた。本稿では、子ども達の幼稚園の生活のなかでいざこざ場面を取り上げ、子ども達がどのように自分の欲求を実現しようとしているかに焦点をあてる。なお、本稿で「いざこざ」として取り上げた事例は、相手の言動に反対するような言動が見られた事例のことを指す。ここでは、そのいざこざのなかでも、主に就学前の子ども達に最も多く見られるという物を巡るいざこざを扱う。観察は、幼稚園生活が二年目になる年長クラスで行った。

#### 一、いざこざを見る視点

いざこざは様々な研究者によって取り上げられる問題でもある。例えば、いざこざの際にどのような方略が使われるのかを検討した研究がある。この研究によれば、最初の方略（いざこざが開始してから最初に使われる方略）として使われるのが、単純な否定・反対理由・対立提案・代替案・服従や同意の延期・言い抜けやごまかしであり、終結の方略（いざこざが終結するときに使われる方略）として、妥協・対立提案・理由・説明の要求・緩和や増長・言い張り・無視があることを示した。また、方略は相互作用的で、相手がどういう方略を使うかによって選択される方略が変わってくることも示された。いざこざの勝敗とルールとの関係を検討した研究もある。この研究では、勝敗を決定するのにどちらが地位的に上かで決定される支配ルールから、どちらが先に持っていたかで決定される先取りルールへ、年齢とともに変わっていくことが示された。

これらの研究から、いざこざは、言語的発達や社会的

発達を促していく場面であることが示唆されている。

実際にいざこざを観察していると、子どもたちは自分の欲求をなんとか通そうとしているのがわかる。その際に、様々な方略を何でも手当たり次第に使っているのではないように見受けられた。つまり、自分が今いる立場で相手に一番有効に機能するような方略を選んで使っているように見えた。それでは、一番有効に機能する方略とはなんなのだろうか。それは、集団のなかで共通になっているルールを反映した方略を使って自分の正当性を強く主張することだと考えられる。例えば、「私が先に使ってたんだから」という先取りルールを使ったり、「これはみんなのものだからね」と共有ルールを使ったりして、自分の欲求を通そうとする。しかし、実際にいざこざのなかで、このようにルールが直接的に示されているとは限らない。幼稚園には様々な文脈があり、その文脈に応じて、効果的なルールの示し方があるはずである。私は、ここで、様々な文脈のなかから、特に、遊び集団内の文脈と遊び集団外の文脈で使われる方

略の相違に注目したい。非常に大雑把な文脈の分類になってしまいが、幼稚園で見られる文脈の特徴的なものとして特に取り上げたい。次に、園のなかで共通になっているルールと文脈について更に詳しく説明しよう。

#### ① 共通ルール

方略に反映される、幼稚園のなかで共通になっているルールとして、少なくとも次の二つがあると考えられる。

1. 物や場所を共有しながら遊ぶこと（共有ルール）
2. 物や場所を先取りした者が優先権を持つこと（先取りルール）

これら二つのルールは、幼稚園の次のような環境から考えられる。幼稚園にある物や場所は、幼稚園に通園する子ども達が持って来たものではなく、幼稚園の財産である。その物や場所は、子ども一人一つの割合であてがうことができるほど、数も量もない。従って、たくさんの子ども達で、限りある物や場所を使って遊びを展開するためには、物や場所を共有しながら遊ぶという、共有



ルールが必要になる。しかし、また、子ども達が自分の遊びを展開するためには、共有されているものを一時的に自分の物にして使う必要がある。従って、先取りしたものが優先権を持つという先取りルールは、遊びを展開するために必要なルールとなる。この先取りルールに関



しては、Bakemanら (Bakeman & Brownly, 1982) の自然場面での就学前児の観察から、就学前児に社会的ルールとして存在することが示唆されている。

②文脈・幼稚園は、様々な遊び集団が存在している。つまり、幼稚園の中には様々な遊び集団があり、その中に子ども達が含まれている、あるいは遊び集団の周辺に子ども達がいる。この遊び集団の存在に焦点をあてると、幼稚園を「幼稚園—遊び集団—個々」という三重円の構造で捉えることができる。この構造の中には少なくとも二つの文脈があると考えられる。一つは、異なる遊び集団同士、あるいは、ある遊び集団とその遊び集団に属さない個人のいざこざ（遊び集団外のいざこざ）という文脈であり、もう一つは集団のなかに属する個人同士のいざこざ（遊び集団内のいざこざ）である。本稿では、幼稚園のなかの様々な文脈から、特にこの二つの文脈に焦点をあててみる。

それでは実際にいざこざを検討し、共通のルールを反映した方略を文脈によって使い分けられているのかどうなの

かを検討してみる。

## 二、実際のいざこざ場面

年長児を四月から十一月まで、週におよそ二回のペースで観察したところ、物を巡るいざこざは40事例あった。そのうち遊び集団内のいざこざは22事例、遊び集団外のいざこざは18事例であった。

### ①遊びの集団内のいざこざ

遊び集団内のいざこざでは、先取りルールが「私が先を使ってたんだから」「私が出てきたんだから」などと直接的に示されることが多かった。また、共有ルールは、争点になるものを相手が手に持っていたり、使っている状況のなかで使われた。「一人だけのものなの」「ずるい」と相手の独り占めを責めたり、逆に「一回も使ったことがないんだから」と自分が独り占めしていないのだということを主張するために使われていた。それでは次に実際に事例をあげてみよう。

事例1/AとBがおままごとコーナーでレストランを始

めようと、飾り付けをしている。その飾りのために植木鉢を置くようとしている場面である。

A …ちよっとまっつてよ、はい、うーん、大丈夫、私が置く、いのいの、いちいち言わなくて、(植木鉢をBに渡そうとせずに、置くようとする)

B …だって、私が出てきたんだもん、Aちゃん、言わなくていいんだから、先生に言い付けるからね、Aちゃん、

A …わーBちゃん、この方がいいんじゃない、Bちゃん、この方がいいかも、

B …おいて、並べてみよ、

A …うん、おおくね、二人で植木鉢を並べだす)

(注…傍線部は共通のルールが示されている箇所。以下同様)

Bの「私が出てきたんだもん」という先取りルールを直接的に示す言い方の後で、AはBに譲歩しだしているのがわかる。Bが「先生に言い付ける」と言ったのも大きな役割をはたしているのか知れないが、AとBの間には、Bの先取りを無視したAの行為が先生に告げること

のできる違反行為であることが認識されていると考えることができる。

この先取りルールを示すいざごさは、22事例中11事例あった。この11事例のうち8事例は、先取りルールを使用した側が自分の主張をとおすことができてきている。このように、遊び集団内のいざごさにおいて、先取りルールが直接的に示されることが多く、それが有効に機能する理由として次のようなことが考えられる。遊び集団内では、遊び集団内にあるものを巡っていざごさが生じる。遊びを展開しているうちに、誰が先に持ってきたのか、誰が先に使っていたのかということが非常にあいまいになりやすい。従って、先取りルールを直接的に示すことが、遊び集団内では有効に働くのかもしれない。

事例2／廊下で子ども達が妖精ごっこをしている。教師が、蜜が出るという花を持ってくる。それをCが取る。他の子ども達(A、B、D)も欲しがり、いざごさになる場面である。

A…ずるーい、一人だけ、自分だけ、(花を持ったCを他の子

ども達で追い掛け)

B…みんなにかしてあげなよ、

C…やだ、あたし、一回も飲んでないもん、

D…ちょっと、聞いて、ちょっと聞いて、ただ、匂いがするだけなんだよ、

C…誰か、この蜜のみたい人、

他の子ども達…はい、

Aが最初に持ったものを誰にも貸そうとしないときに、A、Bから独り占めしていることを責められている。それに対し、Cは「一回も飲んでない」と自分が独り占めしていないことを主張している。ここで独り占めしている、していないということが言い争われていることから、共有ルールが意識されていると考えられる。

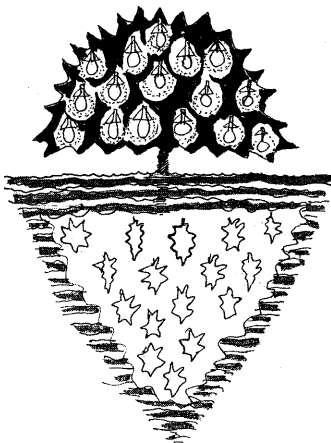
このような共有ルールを示す方略を使用するいざごさは、22事例中9事例あった。この9事例中7事例は共有ルールを示した側が欲求を実現することができた。事例2のように、誰かが先に持っているもの、使っているものに対して独占が責められ、それに対して、「一回も

使ったことがない」などと先取りしている側も独り占めしていないことを主張する。つまり、先取りルールによって使うことや持つことに優先権があったとしても、時間的量的に過度になると、共有ルールによって責められ、先取りしている側は、時間的量的に過度になつていないことを示すために独り占めしていないことを主張するのかもしれない。

## ②遊ば集團外のいざこざ

遊ば集團外のいざこざでは、先取りルールが直接的に使われることがなかった。借りにくる側を拒絶するために使われた方略は、「使っているから」とか「〜に使うから」と、自分の遊ばのための必要性を主張することだった。借りにくる側は、拒絶されても更に相手に譲歩することが多く見られた。例えば、「ちょっとだけいいから」とか「すぐ返すから」などと時間的量的に限定を加えた方略を使用した。この後にも拒絶されて初めて「ずるい」「一人だけのものなの」と相手の独り占めを責める方略を用い、共有のルールを示した。この場合、所

有している側が共有のルールを使って独り占めしていないことを主張することはあまりなかった。また、この共有のルールが示されるのは、借りにきた側が譲歩を何度も試みて断られる場合に多く見られた。次に事例を検討してみよう。



事例3 / おままごとコーナーで「出前屋」をしているB達のところに、他の遊び集団のAがおままごと道具を借りにくる場面である。この場面の前にもAは借りにきて、断わられている。

A .. じゃあ、そいじゃあ、包丁だけでもいいから貸して、

B .. ダメなんですよ、うち、なくなっちゃったんです、

A .. うーそー、あの包丁？

B .. なくなっちゃったんです、

A .. え？

B .. うんと、出前、出前のしか、なくなっちゃったんです、

A .. 箸は？

B .. 箸もありません。出前のしか、

(中略)

A .. 包丁あるじゃない、ここん中に、

B .. あーそれは、今使ってるんです、

A .. えー、いいでしょう、すぐ返しますから、

B .. 使ってますから、使ってるんです、(Aは教室に戻る)

何度も借りようとして断られているAは「包丁だけ

もいいから」と譲歩している。それに対しBは「出前のしなくなっちゃった」「使ってるんです」と、自分の遊びに必要であることを主張する。Aは再び「すぐ返しますから」といって譲歩するが、断られる。結局Aは教室に戻ってしまう。この事例から、譲歩するAには先取りルールがわかっていると考えられる。

このような譲歩の方略が使われた事例は、18事例中10事例であった。10事例中7事例は譲歩の方略を使用した側が、欲求を実現することができた。このような譲歩の方略が使われる理由としては、次のように考えられる。遊び集団外のいざこざでは、ある遊び集団が所有しているものを他の遊び集団の子どもが借りにきて、それが拒絶されたときにいざこざが生じる。従って、所有している遊び集団の先取りは明らかである。借りにくる側が譲歩の方略を使用することから、遊び集団側の先取りを認めていることがわかる。つまり、借りにくる側にも遊び集団側にも先取りルールは認められているため、先取りルールを直接示すことは、必要ないのかもしれない。

事例4 / 教室でおままごとをしていたAが、廊下でおままごとをしているBにおままごと道具を借りにくるが、なかなか貸してもらえないところから始まる場面である。

A .. ねえ、粘土少し頂戴、

B .. ダメダメ、いろいろな料理作るからダメ、

A .. いいじゃん、

B .. 生意気な口きくんじゃねえ、

A .. まないた一個かして、

B .. だめ、

A .. いいじゃん、

B .. ダメだって行ったら、ダメだ、

A .. オープントースターにするんだから、

B .. だめ、

A .. 全部使わないでしょうが、そんなに、

B .. そうだよ、ダメなんだよ、

(Aは教室に戻り教師に告げる)

この事例の前にも借りにきて断られたAは、「少し頂

戴」と譲歩している。しかし、Bに「ダメ」と拒絶されればかりいるAは「全部使わないでしょうが」とBの独り占めを責める。しかし、結局Bに拒否されてしまう。この後、Aが教室に戻って教師に告げていることから、独り占めを責めたAの態度は正当であることをAはわかっているのかもしれない。従って、ここでAは共有のルールを理解していると考えられる。

このように、共有のルールを示す方略は、18事例中7事例であった。そのうち、この方略を使用した側の欲求が実現したのは、7事例中4事例であった。この方略を使用する側は、7事例中5事例が借りにきた側であった。借りにきた側は譲歩を何度も繰り返して、それが拒絶された結果、共有ルールを示す方略を使用するというパターンであった。この使い方は、遊び集団内の場合と異なる。その理由として次のように考えられる。遊び集団外のいざこざでは、他の遊び集団の子どもが借りにくるまで争点となるものは遊び集団が所有している。従って、先取りしている側は、常に遊び集団にあるため、先

取りがあいまいになりやすい遊び集団内のいざこざと比べて、先取りルールが強く働いているのかもしれない。そのために、借りにきた側はすぐに共有ルールを持ち出さずに譲歩の方略を使用するし、先取り側は共有ルールを示す必要がないのかもしれない。

### 三、結論

本稿では、いざこざを、その中で使用される方略に焦点をあてて検討してきた。その結果、有効な方略とは、幼稚園のなかで共通になっているルールを示す方略を使うことであること、その方略も、遊び集団内のいざこざと、遊び集団外のいざこざでは、違いが見られることを示した。子どもたちは、いざこざのなかで自分の欲求を実現するために、方略を文脈ごとに使い分けるといふ力を十分に持っていることがわかった。しかし、ここで取り上げた文脈だけでは、非常に不十分である。もっと様々な文脈が幼稚園のなかにはある。例えば、遊び集団外から遊び集団内と移行する仲間入りなども、一つの文脈

と考えられるだろう。これらの文脈についても更に検討し、子ども達がその中でどんな力を見せているのかを明らかにしたい。また、ここで取り上げた子どもたちは、幼稚園生活が二年目になっている子ども達である。従って、幼稚園のなかで共通になっているルールについては、だいぶ学びとっていたと考えられる。しかし、このルールもすぐに身につくわけではない。いざこざの際に教師が介入することで、次第に身につけていくのかもしれない。この過程については、更に検討することが必要だろう。これからも幼稚園での観察を続けていくが、そのなかで、子ども達が子ども達のなかで生活することによって、どんな力を付けていくのか、何を学んでいくのかを検討していきたい。

(お茶の水女子大学大学院)

## 子ども達とのこと

島田 久美

いったお馴染みさん。「ふーんあの子がもう…。」と幼児個人票をしげしげと眺め、また新顔達のイメージを楽しくふくらませながら、新年度の準備を進めてきました。

お天気が心配された入園式の日は、まぶしい程の青空に恵まれ、「今日からうめ組だよ。仲良くしようね。」と一人一人の園服の胸に赤い名札をつけて、二十四名プラス一の生活がスタートしました。お母さんの体の陰に隠れるようにちよこんと立っていた顔も、日ごとに一人前の幼稚園児らしくなり、潜んでいた腕白ぶりも全開。四歳児の型にはまらないパワーに触れ、二年ぶりの感触をたぐりよせてはみるが、いやいや、今年の子は手強い。幼さゆえの強さも脆さもむき出しで、ケンカをするのも、泣くのも、笑うのも、しょげ返るのも、憎たらしいのも、かわいらしいのも体いっぱい。その子ども達と一緒にあたふたしながら、笑ったり怒ったり、楽しんだり落ち込んだりして

一昨年、昨年と年少から年長への持ちあがり担任を経験して、今年の春、再び年少組の担任となりました。男児十名、女児十四名のうち、ちょうど半分が「○○ちゃんの弟」「△△ちゃんの妹」と



いるうちに、一学期が過ぎていきました。

今、子ども達との生活の喧騒から一步離れ、一学期を振り返ってみますと、どの子も、新しい環境の中で教師を抛り所にして安定しようとし、健気に自分の道を探ろうとしていたのだなと感じられます。教師の所在や動きに敏感に反応し、もっと自分に目を向けてほしい、もっと自分をわかってほしいと訴えている子ども達。その表し方は様で、受け入れられやすいやり方で出す子もいるし、大人から見ても「マイナス」の動きをする子もいる。ストレートに出す子もいるし、遠まわしに出す子もいる。でも、それら全てを子どもからの信号としてまず受け止め、子どもの心に沿って的確に返すことができただろうか。日々の慌しさに紛れ、小さいけれど大切なことを見落として、小さな心を傷つけたことも多かったのではないかと反省しています。年少の一学期は、一人一人の子どものとの関係の基盤を作っていく大切な時期であ

り、安定して心を開いていく子どもの姿をゆっくり見守る時期です。一学期間かかって私にそれを教えてくれたM子のエピソードを次に紹介したいと思います。

M子は、女兒の中で生まれが一番遅く、きゃしゃな体つきと幼児音のやや残る舌足らずなしゃべり方が、無防備な幼さを強く感じさせます。

入園前の秋の面接の日、母親から離れて保育室に入った途端に大パニック。二つ下の弟と互いの服の裾をしっかりと掴み合ったまま、怯えた顔で部屋中をぐるぐる逃げ回り、どんな言葉かけもはね返さんばかりの奇声を発します。母親と一緒に保育室に入ってもらっても落ち着かず、「おんも行く。」とテラスへ。室内に他の子ども達がいたことで、閉鎖的な圧迫感を保育室に感じたのでしょう。テラスで「おうち帰る。」とべそをかいた後、「せっかく来たんだから、一つだけでも遊

ぼうよ。おすべりは好き？」という教師の誘いに少し心が動いたよう。「待っててね、待っててね。」と母親を振り返って念を押しながらすべり台へ。一回すべるとにこにこしてもう一度階段を上る。が、すぐにまた不安な顔になり急いですべり終えると、母親の所にかえりました。

職員室ではM子のこと話が話題になり、入園後はしばらくは大変だろうと予想されました。そして、いよいよ入園式の日。式後、保護者はホールに残って簡単な説明を聞き、子ども達は年長児に連れられて自分達の保育室に一足先に行くことになってはいるのですが、M子は年長組の女児が目の前に差し出した手をすんなりと握り返し、しっかりと手をつないでホールを出ていきました。これには、私達の方が「えっ!？」。M子にとっては、わけがわからないなりに自然な流れだったのでしよう。

翌日からの様子もやはり、わけがわからないまま

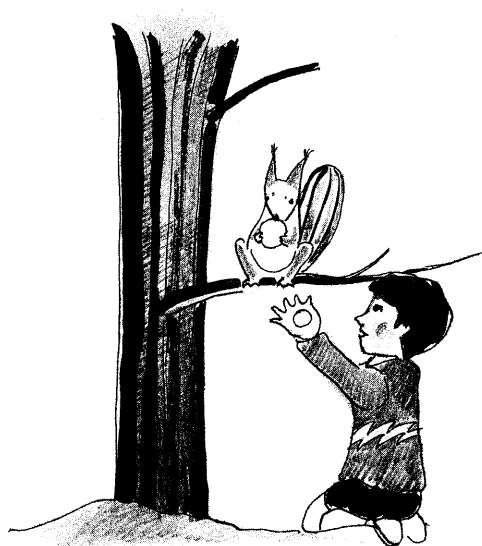
まに園に来てしまっているといった感じで、泣きはしないものの、そこにいるだけで精一杯といった様子が伺えました。室内よりは園庭にいることが多く、砂場の用具入れにちょこんと収まって座りこんでいる日が続きました。そして、私が声をかけても、どう反応していいのかわからないような困ったような曖昧な表情で、体を硬くしていました。

子ども達にも私にも少し余裕が出始めた四月の終わり、誕生会の中で『アブラハムの子』という踊りを皆ですることにしました。教師の動きを真似ながら身振り手振りを愉快につけていく子ども達の姿を見ているのがわかりました。手遊びや歌の時もじっと見ているM子でしたが、この時は楽しい振りにつられて思わず気持ちが一緒になったような見方。M子と目が合う度に、恥ずかしそうなどでも嬉しそうな笑顔が見え、M子の心へつながっていく道が見え始めた瞬間でした。

ある日、他の子どもと砂場で遊んでいた私の後ろへM子もやってきて、しゃがんで砂をいじり始めました。小さな手でギュッギュッと砂を握っています。「あれ、Mちゃん、お団子作ってるのかな。」と声をかけると、にこにこ笑って答えません。私が更にM子の顔をのぞき込むと、M子はますますにこにこして、手に握った砂をとても嬉しそうに「うんこ！」と差し出すではありませんか。それが、M子が初めて自分から私に面と向かって言った言葉だったのです。どんな風に返したらいいのかと一瞬思いながらも「えっ、Mちゃんのうんこなの。ふーん。」と受け取ると、にやんと笑って「ちあうよ。」「じゃ、誰のだろう。」「……わんわんの。」「わんわんのうんこ、どうしよう。」と首をかしげて見せると、「……ここに埋める。」と砂場の隅を指さすので、二人で穴を掘って埋めました。この「わんわんのうんこ」の遊びはM子の気に入ったらしく、その後も何度

か繰り返されました。

園内でM子の笑顔が多く見られるようになってくると同時に、ふわふわしていたのが急に我に帰るかのように泣くことも多くなりました。遊ん



でいる途中で「おうちに帰るよー、おうちに帰るよー。」としくしく始めますが、その立ち直りも早くなりました。少しずつ、自分の周りが見えてきている、そんな感じでした。

いつも登園時間の早いM子ですが、朝、他の子ども達が来る前のひとときが安心して私とおしゃべりを楽しめる時間ようです。「パパと来たの。会社、近くなの。」「Y（弟）ねえ、足ぶつけて痛くしたの。」「きのう髪の毛切ったの。前だけ。」「きょう、すいか食べたの。」自分の身の回りの出来事を伝える言葉がM子の「おはよう」代わりになりました。また、私に向かつてぶったり蹴ったり、いけないと承知のことをわざとしてみせたりなど、私がどんな反応をする人間なのかを試し、そこから生じる触れ合いを求めているようでした。

自分の周りの物への興味も増してきて、紙類、ハサミ、のり、ホチキスなどの試しそのものに

黙々と取り組んだり、園庭の虫探しに熱中したりする姿が見られるようになりました。園内で安定できる場や過ごし方を見つけたようです。

一学期末、M子の母親が、「幼稚園がとても好きみたいです。中でも先生が一番好きなんですって。」という話を聞かせてくれました。教師にとつて何よりの励みとなるのは、「幼稚園が好き。先生が好き。」という子どもの思いです。その思いを裏切らないようにしたいものです。そしてまた、「子どもって面白いな、不思議だな、すごいな」とわくわくできる楽しさを、いつまでも自分の中にもつていたいと思います。

（杉並区立方南幼稚園）



回転させたい程の強い抵抗を感じていたのでした。けれどそれも、経験者にはおわかりでしょうが、あの激痛の前に敢えなく降参となり、夫、娘たち、年老いた両親等に、助力を頼まなくてはならない入院という事態を迎えてしまったのです。とにかく安静にしていなければならぬということのみこめるまでに何と多くの時間がかかったことでしょう。お産以外で入院などしたことのない私にとってそれは大事件だったのです。

結果として、その入院生活によって私は失うことよりもかえって多くのことを学び得たのですが、落ちこんだ気分を回復するには予想以上に長い時間を費やし、ようやくこの頃になって気分を高揚させることができ始めたところです。

当時、私としては反省すべき所が多々あり恥じ入っていました。不思議なことに、家族も友人も知人もほとんどそういう点に触れず、ひたすら親切にそれぞれのできる限りのことをしてくれたのは多少の驚きでもあり、嬉しくもありました。ひょっとして、私は無意識の内に

そういう親切を期待して、その原因を自ら作っていたのかもしれないとさえ今では思えるほどに、私は不思議な幸福感に浸っていました。

まず、第一に、高校一年生になっていた長女はちょうど夏休みということもあり、私に代わって一切の家事をこなした上に、片道一時間の道のりを一日おきに病院へ通って来てくれたことがあげられます。これは私の想像以上のできごとでした。正直なところ私はそこまでは長女に期待していませんでした。私はこの際とばかり、長女に甘えるだけ甘えて遠慮なく注文を出し、退屈しのぎの本を持ってきてもらったたり、洗濯物を頼んだり、一番安心して頼むことができたのです。しかも長女は頼まれないことで私の喜ぶことを幾つもしてくれて、ほとんど毎日張り切って料理をし、好き嫌いの多い次女にはいろいろな工夫をして嫌いなものまで食べさせ、きちんと家計簿をつけて私の期待以上の黒字にしてみました。おまけに私はそんな長女を誰彼となく自慢することの喜びまで手に入れたのでした。私は主婦として

の自分の地位が脅かされる危険を感じるよりも、日頃、目にするのでできなかつた長女の成長ぶりを知って母としてむしろ誇らしく嬉しく思つて実に幸福でした。

それに比して五歳年下の次女の方は、専ら子ども扱いされて嫌いなものを無理矢理食べさせられ、引き立て役という損な役回りで、病院に来ては、「早く返つて来て」と甘えて行くので、この子のためにも早く良くならなくてはと思わせてくれる有難い存在なのでした。

その頃、夫は職場でも管理職として多忙を極めているにもかかわらず、住居のマンションでも管理組合の役員として、ほとんどの週末さえ仕事に費やしていました。私の通院入院に当たっては、ほぼそれらに最優先で付き添つてくれました。これでは夫の方が倒れてしまわないだろうかと心配し、私はどこか心の隅でそういう夫に詫びていたものの、夫婦が余りにも別々の時を過ごしていることの多い日本の生活に対して、私自身秘かな不満が高まっていたことに改めて気づかされたのでした。夫が付き添つてくれたり、見舞いに来てくれたりするこ

とにとまどいや照れのようなものを感じながらも、それは私には嬉しい事であり、恐らくは私が無意識の内に最も期待していたことなのでしたから。

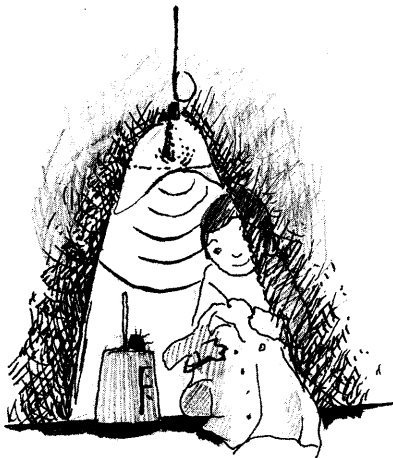
入院という大事にまでなると、親類や友人の見舞いがあり、日頃何の事件もなく平穩に過ごしている時には会えないような個人的なつながりの人々が向こうから訪ねてくれて、その表面的な装いや表情の奥にある本物の心を透かして見せて行つてくれたばかりでなく、自分の方も、真に求めて会いたい人の姿がはっきりしてくるようでした。痛みはいくら激しくとも生命の危険のない気楽な入院生活であつた私は、その時、誰を最も必要としていたか、あまりにも当たり前にも、私の家族、夫と二人の娘たちであつたことを悟つたのでした。アメリカで生活していた時には、実家や友人たちから切り離され、祖国から切り離されてむしろ自分が両親や母国といかに深くつながっていたかということを感じ知らされたそのように、私はこの入院によつて今では自分が夫や長女とどれほど深くつながっていたかということを感じ知らされ

たのでした。けれどその頃私は、自分だけがその家族から取り残されたように感じていたのでした。それが世話をする立場から、世話を受ける立場へと逆転して、取り残されてはいないということを確認することができたのでした。

私の姿勢は、それまでの気負いが、心身共に取れて、「休め」の状態になっていました。その間に私は自分の肉体的な「老い」に対して、じっくりとしかも前向きに考える時を持つことができたように思います。老化を絶対に認めたくないという頑なまでの「若さ」への執着が少しずつ、行きつもどりつしながら解消していききました。長女や夫に労わられることの快感が、若さを失いつつあるという痛みを和らげてくれたのです。そればかりか、若さを失うことの方にばかり気を取られ、それと共に得てきたものが私の目には見えていなかったことに気づき始めてもいました。ほとんど止まってしまったようなゆったりとした時の流れの中で、私は、もっと年老いた人のこと、病床の人のこと、身体の不自由な人々の心

の一端に触れたように思いました。

その頃甘えん坊の小学生だった次女も今は中学生となりました。彼女が中学生になった途端、又しても私は、自分の中学時代を物差しにして、次女の自立を促し始





め、待てない自分の性懲りのなさにあきれっていますが、今度は長女がしっかり口をはさむので対立、対決の構図にならず、むしろ私には面白く、ゆとりさえ感じています。今はそういう娘二人とのダイナミックな関係を大いに楽しんでいる私です。

長女が中学生だった頃、私はしきりに自分自身の中学時代と比較しては、長女のすることなすことを、自分の中学時代を理想モデルとして、批判的に見るが多かったものです。それにはいくつかの点で無理があったはずですが、そう納得することが当時の私には困難だったのです。まず、時代の違いということがあるにもかかわらず、私に見えてくるまでにあまりにも多くの時間がかかったこと。自分自身のことでも、記憶にだけ頼っているのに、理想化し過ぎる面のあることを容易に無視しがちであったこと。そして最も大切なことは、長女は、私ではなく、全く別の一人の人格であることをつい忘れそうになることでした。長女のこととは私が一番よくわ

かっているという自負が強過ぎたのです。私は長女が中学を卒業し高校生になるまで、それらのことを頭ではわかってはいるつもりで、心から納得することはできずいたのだと思います。私の入院は私の長女からの分離を果たすのに大きな転換点となりました。それは、私の方からなされた分離独立宣言だったのかもしれませんが、彼女はそれに全く良く応えてくれました。

一方、父と娘の間は更にその一年後に、長女の側から問題がつきつけられ今に到るまで解決していかないようです。

私は入院によって降参し、自分の生き方にはつきり節目を作ることになったのですが、夫の方はあい変わらず、働き過ぎの毎日という生活に変化は起きていません。夫は父を亡くしたり数々の試練を経てもなお大筋でそれまでの強いイメージのままでした。さすがに「疲れた」という言葉は連発し続けていたものの、管理組合の方もやめるにやめられない状態のままでした。ところが、昨年の夏、突然に、今度はヨーロッパに事務所を開

設することになったのでその準備にすぐにも単身で行くようにという話を持ち上がったのです。それから一か月もたつたかないかの内に夫は赴任して行き、今もその状態が続いています。長女は進路の選択に当たり、強過ぎる父親の影響がその不在によって軽減され、これまでより自由に振る舞っています。それまで私の方から尋ねてもなかなか本当の希望を言わなかったのに、気楽に事ある毎に自分から話してくれるようになりました。

夫は、私の心配をよそに、ひたすら日本の猛烈ビジネスマンの道を歩み続けていますが、娘たちと私は束の間の休息を得ています。私は、それが長女にとって進路決定の大事な時期であったことを喜びながら、単身生活をすることやヨーロッパの人々の生活を見聞することによって、夫が自身の生き方や家族である私たちに対する期待を少し変えて、もっと柔軟になってくれることを期待しています。去年の九月に出発して行って、たった三か月で年末年始の休暇に一時帰国した時、すでに相当の変化を見せて私たちを驚かせた夫ですから、この期待は

実現する可能性大だと思っています。

いずれ夫と生活するため私もベルギーへ行くことになりましょうが、長女は一緒に行くことになるのかならないのか今は全くわからなくなってきました。

思えば十年前、アメリカへ家族四人で旅立った時も、七年前に帰国した時も、再び外国で生活することになるうとは少しも予想していなかった私たちです。それにしても世界の変わり方の速さはますます加速しています。アメリカから帰って以来の日本社会への再適應の困難な過程をふり返ると本当のところ、今度のベルギー行きは、外国が初めてではないという利点を考慮しても、決して心はずむ期待ばかりでなく、緊張と不安が高まり、増していくものです。

日本社会の閉鎖性ということが最近とみに外国から指摘されるようになっていますが、それは日本の内側からだけ見ていると気がつきにくいもののようなのです。と言うより気づいていながら変革を望まないのだと言った方が

よいのかもしれませんが。私のように外国で暮らして再び日本で暮らすことになった日本人の家族の数は今でもほとんど増えているはずですが、そういう人々の声が十分に生かされているとは言い難いのが現状のようです。帰国したばかりの頃は、私も思わず口に出して言っていたことを七年もたつ内に次第に言わなくなってきましたが、それは口に出しても大勢には何の影響も与えられなばかりか変わり者扱いされて、無視されたり、かえって反発を受けたりする苦い体験を重ねることによってそうなっていくのです。

新しい考えが提案されても、それはただ新しいからという理由で試みることさえ封じてしまう仕組みが、この社会にはできあがっていないでしょうか。家族が共に過ごす時をふやすためには私が確信している学校の週休二日制にしても、もっと積極的な意味を母親たちに見出してほしいものだと思いますが、多くの母親はそのマイナス面ばかりを理由にあげて、本音の反対理由を隠そうとしています。最近、ほんの一部で週休二日制が

試行され始め、思った以上に家族や母親にプラスの効果があったと聞きました。新しいアイデアが提案されたら、私たちはもっとその良い効果を期待するように考え方を変えていくことが、もう少し必要なのではないのでしょうか。マイナス面を強調して慎重にとらうばかりではいけないというのが外国からの言い分のような気がします。リスクの多い初めての事業には、外国の方々へお先にどうぞといつまでも言っていられないほど日本はお金持ちになってしまったのです。

そしてその前に、全く新しい考え方をものをひとりひとりが提案することができるようしていくことが求められています。独創性と言うことです。そのためには、まず、新しい考え方をもっと気楽にいくつでも表明してみることでできる開かれた雰囲気私たちの周りに作っていくことが大切だと思います。その点では、私たちは子どもたちから多くのことが学べると思います。幼稚園や学校で、他の子どもたちとは違うユニークな発想をする子どもを、先生や保育者は大いに励まし勇気づけ

てほしいと思います。新しいことに挑戦する時には、次に起こる事態の予測で悲観的な方向に傾きがちであるわけですから、できるだけ多くの樂觀的予測を、共に出し合っていくようにするといいかもれません。アイディアの創始だけでなく、予測についても、子供たちの方が優れているということがあり得ると思います。先入観を捨て、とにかく新しい考えを、今までにない方法をと発想し、それを表明する機会を豊かに保証していくことが、何よりも出発点にならなければなりません。

例えば、神奈川県では、オートバイの三ない運動という高校の規則が、逆転の発想によって、安全教育をすること、本来の目的である無事故を目指すことになったというニュースがあります。ここでも、一律にそのように転換するには、学校によっては準備も心構えもできていない所にとまどいが生じているということですが、教師だけで実行しようとするばかりでなく、警察やPTAはもちろん、生徒自身を参加させて共に方策を探っていくとすれば予想以上の進展があり得ると思います。

子どもの発想力を評価するというのは、しかし、決して楽な道ではありません。大人も全身全霊で応じていくことを要求されるからです。けれど、世の中の流れは、ソ連や東欧で起きている大変革に見るように、大きな意味ではつきりと見えてきたことが、いっそう多くの人々に実感されているのではないのでしょうか。これまで弱者の立場におかれてきた老人、子ども、女性、心身障害者等の力が見直されてきています。地球規模での環境破壊が問題にされ始め、人間以外の生き物にもその目が向けられ始めました。全世界で起こっているすべての事象は、大きな全体的な意味においてひとつにつながっているということがこれほどはつきりとそれも個々人のレベルで自覚され、目に見えるようになってきた時代はなかったのではないのでしょうか。

日本の政府が規制緩和を求められているように、既存の秩序や枠組みがあらゆる所で問い直されていると見るべきでしょう。その意味で日本の教育界、学校という社会は見直されるべき最有力候補であると思うのですが、

どうでしょう、中学、高校なども校則の上にあぐらをかいていられるのでしょうか。

長女の中学時代、PTAの役員をして感じたことでも忘れられないことがあります。私は自分で取り立てて新しいことをしたつもりはありませんでしたが、「前例のないことだから」という理由で、委員会で話し合い決定した事項を覆されたことがあります。私はその時よりよく私の提案や実行の幾つものが、前例のないことだったのだと気づきました。手続き上の不備や内容的な問題点を指摘されるのならともかく、前例が問題になるとは、私は驚きの余り絶句してしまいました。それは私の未熟さ、政治力のなさというものであったかと今では思っています。PTAにしろ、組織といふもののいったん硬直した時の恐ろしさを見た思いがしたのでした。下積みをつつこつこなし、階段をひとつひとつ登るようにして、組織内で人脈を養いながら次第に重要なポストについていくというやり方をしない限り、意見や提案そのものの正当さだけでは通用しないというのが日

本のあらかたの組織のあり様であるのなら、そのことが今は外国から批難されているのではないかと思えます。

幼稚園や学校は、世界の動きを先取りする形で理想をかかげ、それに向かって歩んでいくことのできる子どもを育てることを目標にしてほしいものですが、組織というもののがちな硬直性を思う時、学校に期待するよりもむしろ、素早く変化に対応していける家庭や個人の生き生きと生活できる時間と場所をふやしていくことに力点をおくべきなのではと思うのです。

今月は、私たちの生活になくはならない「日・火・灯」について特集を組みました。子どもたちの遊びの中にも、かげふみ、花火、たき火など、楽しい「日」や「火」はたくさんあります。

たき火というと、娘の保育園時代を思い出します。娘の通っていた保育園は、都内とはいえ、周囲を畑に囲まれた田園地域の小高い丘の上にあります。

毎年春になると、すぐ近くに借りている区民農園にさつま芋の苗を植え、夏の間、子どもたちと先生が手入れをし、秋になると、全員で畑に出かけ収穫します。掘ったお芋は、お天気の良い日にお日様に干し、保存されます。

そして、十月末頃から、落ち葉の季節になると、園長先生が、たき火を始めます。はじめは、園長先生一人で、庭のそうじを兼ねて落ち葉を集めて、火をつけて……のんびりと、ついでに不用の書類なども燃やしなからのたき火です。

そのうち、火の具合がちょうどよく

なってくると、子どもたちも集まってきたり、やき芋が始まります。

最初の年には、お芋をそのまま火の中に入れてしまい、外側は真っ黒で、中はなま焼けという失敗もありましたが、年を重ねるうちに、アルミ箔をまいたり、早く焼けるように小さく切ったり、工夫され、おいしいやき芋ができるようになりました。

保育園のまわりには、桜や樺の木がたくさんあり、落ち葉には不自由しない環境でした。

何日かして落ち葉がたまると、子どもたちはリヤカーで集めて運び、何回もたき火ややき芋屋さんごっこを楽しんだものでした。

都会に生活する私たち大人には、戸外で火を燃やすという楽しみは日常から消えつつあります。自然を楽しみ、季節を味わうたき火という小さな楽しみも、幼稚園や学校という、季節感ある生活の中でしか味わえなくなるのでしょうか。

## 幼児の教育

第八十九巻 第十一号

(一九九〇年十一月号)

定価四一〇円(本体三九八円)

平成二年十一月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一一一

印刷所 お茶の水女子大学附属幼稚園内

図書印刷株式会社

東京都港区三田五一一二一一

発売所 株式会社フレールベル館

東京都千代田区神田小川町三一

振替口座 東京九一一九六四〇

電話 〇三一二九二七七八一

●本誌購読のご注文は、発売所フレールベル館にお願いいたします。

●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

# 幼児の探究心を育てる図鑑、小学校の「生活科」にも役立つ。

ふしぎがわかる

## しぜん図鑑

●第1巻

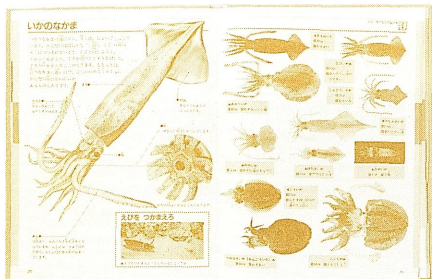
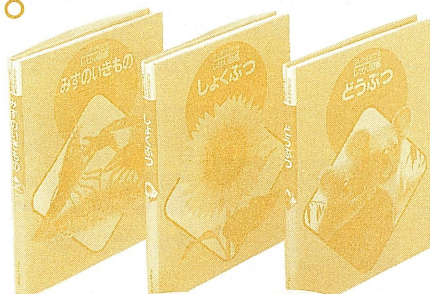
●第2巻

こんちゅう どうぶつ

●第3巻

●第4巻

しょくぶつ みずのいきもの



●なぜだろう、どうしてだろうといった疑問に答える記事もとりあげてあります。豊富な写真とイラストを組み合わせて構成してあります。

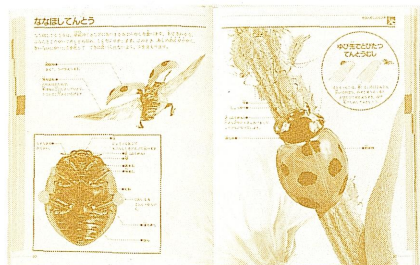
監修

監修 水野丈夫  
 東京都多摩動物公園園長 矢島 稔  
 東京都井の頭自然文化園園長 増井光子  
 園芸研究家 浅山英一  
 国立科学博物館 武田正倫

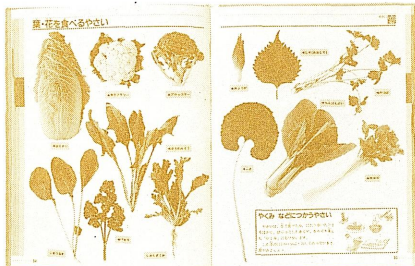
A4判・上製本・本文116頁

全4巻・定価6,800円(本体6,600円)

各巻定価1,700円(本体1,650円)



●スーパーリアリズムのワイドな画面によって動植物への関心を高め、そのふしぎさに気づいていきます。



●基本的な図鑑としての役割を十分にはたしながら、子どもたちの探究心や科学する心を育てます。

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

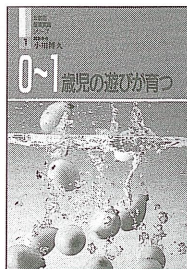
キンダーブックの  
**フレール館**



# 年齢別保育実践シリーズ〈全5巻〉

新教育要領が望んでいる自主性を育てる保育に必要な  
援助の仕方と子どもを見る目を養う保育実践書。

## 第1巻



### 0～1歳児の 遊びが育つ

編集／小川清美

人間の一生の中で最も急速にドラマチックに発達を展開する0～1歳代の子どもの姿をとらえるもの。

このシリーズは幼稚園教育要領・保育所保育指針の基本にそって編集しました。現場の保育者、保育者養成担当の研究者の方々にとって、「遊び中心の保育とは何か」は重要な課題です。

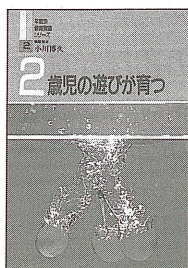
この課題に具体的に応えるため、年齢別保育の実践例を中心に考察を加え遊びの発達が見通せるように工夫しました。

編集責任 東京学芸大学教授 小川博久

A5判・1～4巻 264頁、5巻 288頁

定価各2,000円（本体各1,942円）

## 第2巻

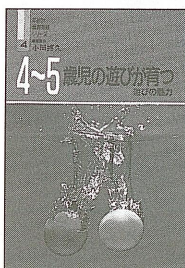


### 2歳児の 遊びが育つ

編集／野本茂夫

自由に歩けるようになった2歳代の子どもがいろいろな環境とかがわりながら成長していく姿をとらえたもの。

## 第4巻



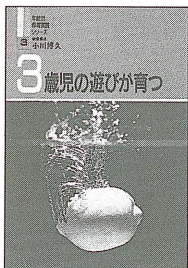
### 4～5歳児の 遊びが育つ

——遊びの魅力——

編集／河邊貴子  
戸田雅美

子どもが興味をもつ遊びの魅力はどんなところにあるのか、身近な保育の中からとらえたもの。

## 第3巻

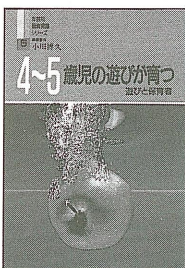


### 3歳児の 遊びが育つ

編集／平山許江

集団生活に入りにくい3歳代の子どもの遊びから、友だちづくりと生活習慣の自立と遊びへの姿をとらえたもの。

## 第5巻



### 4～5歳児の 遊びが育つ

——遊びと保育者——

編集／河邊貴子  
戸田雅美

つぎつぎと変化する子ども遊びに保育者はどのように関わっていけばよいのかについて考える書。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの  
フレーベル館